

浮世絵としての「源頼朝公上洛官位之図」を考える

寺西貞弘

はじめに

小稿が、論じようとする作品は、「源頼朝公上洛官位之図」という浮世絵である。三枚一組の未表装で、法量は縦三八・〇cm、横七四・八cmである。和歌山市立博物館所蔵の作品である。作期は元治元年（一八六四）である。もちろん、これまでに同博物館で展示したこともあり、その際展示解説も付されていた^①。

同博物館は、歴史博物館であり、もちろん、本作品も和歌山の幕末維新期の歴史を語る資料として、展示されたのである。本作品は、近世史を専攻する優秀な学芸員によって、歴史資料として、きわめて適切に扱われたことは言うまでもない。その一方で、私はある大学の博物館実習を担当しており、本作品を通して、浮世絵の特徴を語ったことがある。そこで、本作品を通して浮世絵の特徴を何点か紹介したいと思う。

まず、本作品の概要を紹介したい。次いで、「源頼朝公上洛官位之図」という作品が、和歌山の近現代史の何を語っているかを考えたい。そして、最後に本作品の浮世絵として具備している特徴を指摘したい。

一 「源頼朝公上洛官位之図」の概要

本作品の現状及び法量については、先述したとおりである。本作品は、かつて和歌山市立博物館が開催した特別展「幕末の紀州藩」（会期…二〇一七年一〇月二一日～一二月二六日）において、歴史資料として展示された。その際、展示解説が付されたが、その解説が、同特別展の図録に、次のように掲載されている。

源頼朝に仮託して徳川家茂の再上洛を描いた浮世絵。文久三年（一八六三）一二月二七日江戸を出発した家茂は、軍艦・翔鶴丸で海路京都をめざした。正月五日に紀州大島へ着き串本浦に上陸、六日に由良浦へ到着、西北風が激しかったため上陸し、翌日も強風のため滞在した。八日に由良浦を出立し大坂城に入城、一五日に二条城へ入り、二一日に参内した。

この解説では、まず「源頼朝に仮託して徳川家茂の再上洛を描いた浮世絵」と言い切り、その後、一四代将軍家茂の再上洛の日程を詳細に記している。本作品が家茂再上洛を、頼朝の上洛に仮託していることは事



源頼朝公上洛官位之図

実である。そして、家茂再上洛の日程も、事実その通りである。したがって、歴史展示の解説としては全く適切であるといえるだろう。

しかし、なにゆえ家茂再上洛を、頼朝の上洛に仮託する必要があったのかを説明していない。家茂の再上洛が、幕末の紀州藩にとって、喫緊の課題となる事件であるから、その説明に字数を割くことを憚ったのであろう。^②しかし、本作品が頼朝上洛に仮託しなくてはならなかった背景にこそが、本作品が浮世絵であることの大きな意味なのである。そのことに言及する前に、本作品の構図を説明しておきたい。

本作品は、三枚一組である。その三枚を、向かって右から第一〜三紙と、以下呼称する。第一紙右上に、四角に囲んだ黄色地に、墨字で「源頼朝公上洛官位之図」という一文字が四行で書かれている。これが、本作品の画題である。すなわち、本作品は、この画題によって、間違いなく源頼朝が上洛した事実を主題に描いたものであることを主張しているのである。

第一紙右下に、四角囲みで赤地に墨字で「五雲亭貞秀画」とあり、第二紙左下と第三紙左下にも同様の記載がある。^③このことから、五雲亭貞秀こそが、この作品の版下を描いた浮世絵師であることがわかる。第三紙左下の「五雲亭貞秀画」の左側に、四角囲みの黄色地に「山本平吉梓」とある。梓は、木版の素材に用いられることが多いことから、出版そのものを「上梓」と言い慣わしている。すなわち、山本平吉が本作品の出版者、すなわち版元であることがわかる。さらに、版元の左側に、四角囲みがなく、「片岡彫長」と記されている。彫長が名前とは思われない。片岡某が彫師たちの長を務めたという意味ではないかと思われる。

第一紙の右上から第三紙の左下にかけて、画面を二分するように斜めに霞がたなびいている。その霞の下には、波を切って進む船舶が描かれている。おそらく、これが源頼朝が上洛のために乗船している船舶であると主張しているのだろう。その背景に、海岸線と山々が描かれている。第一紙には、上部に右から「カツラキ山」「二上岳」「イコマ山」とあり、その下に右から「堺」「住吉」「大坂」と沿岸の地名が見える。さらに、第二紙には上部に右から「イバラキ山」「ミノヲ山」とあり、その下にはやはり右から「尼ヶサキ」「西ノ宮」「ナダ」と沿岸地名が見える。すなわち、これらの地名の配置から見て、描かれている船舶は大阪湾を北に向かって進んでいることがわかるのである。

霞の上には、衣冠束帯姿の貴族たちが居並ぶ宮殿が描かれている。衣冠束帯の貴族たちが平伏していることから、おそらく、この宮殿の中に天子が南面北坐しているであろう。第二紙左上部に、桜と思われる樹木が描かれている。そして、第三紙中ほどやや下部に緑葉を茂らせた樹木が描かれている。これは、天皇から見て左手に桜があることから、左近の桜と呼ばれるものである。すると、青葉を茂らせている樹木は、それに対応する右近の橘であろう。

『古事談』によると、平安遷都の際に桓武天皇が、紫宸殿の前庭に梅の木を植えられたが、承和年中に枯れ失せてしまった。その後、仁明天皇が改めて梅を植えられたが、天徳二年（九五八）の内裏焼亡の際に焼失してしまった。その後の内裏造営の際に、式部卿重明王が自らの家から桜を移して植えたという^④。以来、紫宸殿の前庭のこの位置には、梅ではなく桜が位置することとなった。なお、橘は内裏造営以前からこの地に

存在したと伝えられている。

紫宸殿を警護する左近衛府が、天皇から見て左手の桜の木のあたりに陣取り、右近衛府が天皇から見て右手の橘の木のあたりに陣取ったことから、「左近の桜、右近の橘」と称されるようになったといわれている。これらのことから、本作品に描かれている宮殿は、内裏紫宸殿であると思われる。すなわち、霞の下では、船上上洛する頼朝を描いており、霞の上では、その頼朝がたどり着いた内裏紫宸殿を描いているのである。頼朝のこととなった時間における行爲を、一面の図画に仕上げた、まさしく異時同図法を用いているのである。

たしかに、頼朝は上洛したことがあった。それでは、頼朝の上洛はどのようなものだったのだろうか^⑤。『吾妻鑑』に基づいて、彼の上洛の様子を概観してみよう。奥州藤原氏を滅ぼして、反武装勢力を一掃した頼朝は、建久元年（一一九〇）一〇月三日に、精兵一千余を引き連れて鎌倉を出発する。先陣を畠山重忠が、後陣を千葉常胤がつとめ、頼朝自身は黒毛の名馬にまたがったという。途中父義朝の最期の地である尾張国の野間などを巡りながら、一月七日に上洛し、一日に後白河法皇に拜謁している。その際、正二位権大納言・右近衛大将の任官叙位を受けている。

しかし、一二月四日にはこの位階・官職を辞退し、一四日には鎌倉に帰っている。頼朝は、朝廷とのいさかきを避けるため、従順に上洛し、官位と官職を受けている。しかし、頼朝自身が朝廷の序列の中に位置づけられることを拒んだのである。そして、頼朝が開いた鎌倉幕府を、朝廷から隔絶した存在に位置づけたかったのである。頼朝の上洛は、生涯

この一度だけである。そして、その上洛はその後に辞退したとはいえず、まさしく官と位を受けるための上洛だったのである。

その意味で、「源頼朝公上洛官位之図」という画題は、まさしく射しているといえるであろう。しかし、彼が一千の精兵を引き連れ、黒毛の名馬にまたがって鎌倉を出発したことや、尾張国野間などを巡っていることから、海路ではなく、明らかに陸路を取って上洛したことは間違いないであろう。それゆえ、船での上洛を描いている本作品は、頼朝の上洛を描くといいながらも、全く当てはまらないことになるのである。

二 「源頼朝公上洛官位之図」は何を語っているのか

頼朝は陸路を採って上洛した。しかし、本作品は、頼朝が海路で上洛したと強弁しているのである。なにゆえ、そのような外れな強弁をしたのであろうか。歴代将軍と呼ばれた存在は、日本史上多く数えることができる。とくに、洛中室町に幕府を置いた室町幕府の歴代将軍は、京都で生活していたが、京洛を遠く離れた鎌倉幕府・江戸幕府の将軍は、天皇に拝謁しようと思えば、きわめて遠い上洛の旅に出る必要があった。ところが、鎌倉幕府将軍も江戸幕府将軍も、上洛をした将軍は、いたって少ないのである。江戸幕府将軍の場合、初代将軍家康は、豊臣氏が健在であったころは、表面上臣従の行動をとる必要があったことから、上洛する必要があった。二代将軍秀忠は、慶長一六年（一六〇五）に将軍襲職後の二月に一六万の大軍を率いて上洛している。新将軍としての武威を朝廷に見せつけたかったのであろう。

第三代将軍家光は、元和九年（一六二三）に上洛しているが、将軍としてではなく、世子として秀忠に付き従っての上洛であった。家光が将軍として上洛したのは、寛永三年（一六二六）に後水尾天皇の二条城行幸を迎えるための上洛であった。そして、寛永一一年にも、紫衣事件によって冷え込んだ幕朝関係を修正するために上洛している^⑥。そして、それ以後の江戸幕府将軍は、永らく上洛することがなかった。

元禄一四年（一七〇一）、勅使供応役を命じられた浅野内匠頭長矩が、高家吉良上野介義央を、江戸城内松の廊下で切りつけた赤穂事件は有名である。この時の勅使は、五代将軍綱吉の生母である桂昌院（玉の方）に、女性としては前代未聞の従一位を授けるためにやってきたものであった。幕府の権威が上がると、上洛して天皇の前にひれ伏すこともせず、勅使を江戸まで下向させていたのである。紀州藩出身で八代将軍を襲職した吉宗も、将軍宣下は下向してきた勅使によって、江戸城内で享保元年（一七一六）八月一三日に行われているのである。

しかし、幕末になって、幕府の権威が下降すると、江戸幕府将軍と云えども、上洛せざるを得なくなるのである。文久二年（一八六二）に皇女和宮の降嫁を受けた一四代将軍家茂は、朝廷の攘夷実行を求める要求にこたえて、文久三年三月四日に江戸幕府将軍としては二二九年ぶりに上洛している^⑦。すなわち、江戸幕府将軍が朝廷に呼びつけられたのである。ただし、この時の家茂は、三千の精兵を引き連れて、金扇の馬印を先頭に掲げて、陸路で上洛している。

朝廷の求める攘夷の過激さに恐れをなして、家茂は大坂から海路江戸に帰っている。本作品は、先に見た通り、北に向かって船舶が進んでい

ることから、この時の様子を描いたものではないことがわかる。そして、文久四年（元治元年）正月一五日には、再び上洛しているが、この時は翔鶴丸に乗船して海路を用いている。海路の上洛であれば、その供揃えは乗船できる人数に限ることができるのである。幕府財政はそれほどまでに逼迫していたのである。その後家茂は、五月一六日に大坂から江戸に向かっている。

すなわち、源頼朝は確かに上洛をしたが、船で上洛したのではないのである。しかも、頼朝の上洛は、一〇月のことであり、本作品に描かれているように、左近の桜に花が咲いていることは絶対になかったであろう。それに対して、日本史上、船で上洛した將軍は、幕末の徳川家茂以外には存在しなかったのである。しかも、家茂の上洛は、文久三年が三月からであり、文久四年のそれは、正月から五月であるから、いずれにしても上洛中に左近の桜は花を咲かせていたことであろう。

したがって、本作品は、「源頼朝公上洛官位之図」と強弁しているが、実は徳川家茂の再上洛を描いているに他ならないのである。このことから、本作品を展示し、その解説を施した学芸員の見識は正鵠を得ていたというべきであろう。それほど明確な事実がありながらも、本作品が「源頼朝公上洛官位之図」であると強弁する背景には、どのような事情があるのであろうか。それこそが、本作品が浮世絵であることによるものであるといえるであろう。

三 浮世絵であるというの意味

本作品を一見して、大きな違和感を懐くのは、画題を「源頼朝公上洛官位之図」としながらも、霞の下に描かれている船舶が外輪蒸気船なのである。このような船舶が、頼朝が活躍した平安末期・鎌倉初期に存在するはずのことは周知のことであろう。一方、家茂が再上洛を果たした際に、乗船していた翔鶴丸は、安政四年（一八五七）にアメリカのニューヨークで建造された商船で、文久三年（一八六三）に、イギリスのデント組合を通して、一四五、〇〇〇ドルで江戸幕府が購入している。そして、翔鶴丸は木造船ではあったが、間違いなく外輪蒸気船であった。その意味で、頼朝が乗船していたとして描かれている船舶は、家茂が再上洛の際に乗船していた翔鶴丸を正確に描いているといえるだろう。すなわち、本作品の編者は、家茂の再上洛を正確に把握しながらも、本作品をあえて、頼朝の上洛であると強弁していることになるのである。

学芸員が、絵画を展示する際にもっとも困ることは、ほとんどの絵画の本紙に、画題が記されていないことである。箱書きに記されていることが多いので、それを参考にして画題を決めることが多い。しかし、箱書きさえもない場合は、学芸員の知識によって画題を決定しなくてはならない。例えば、井戸のそばに、幼い男女を描かれている構図の絵があったとしよう。それを一目見れば、『伊勢物語』二三段の物語を、学芸員は即座に思い起こすであろう。幼い男女が井戸のそばでともに遊び、やがて成長して結ばれるという物語である。その際、成長した男は、「筒井つゝの井筒にかけし まるがたけ 過ぎにけらしな 妹見ざるまに」と詠じて

いる。井戸（井筒）のそばで幼く遊んでいたが、私の身長はあなたを少し見ないうちに、成長して井戸杵よりも背が高くなってしまった、と詠んでいるのである。ところが、その画題を本紙に記している場合は滅多にない。せいぜい上記の和歌を讃として記している程度であろう。それでも、構図や賛の和歌を一目見れば、学芸員はその作品を「筒井筒図」と名づけるであろう。

ところが、本作品は画題を「源頼朝公上洛官位之図」として明示してくれているのである。まことにありがたい限りである。とはいえ、上述したように、本来家茂の再上洛を描いているはずの本作品を、頼朝の上洛であると強弁しているのである。その背景には何があったのであろうか。絵師や版元は、先に見たように、本作品が家茂の上洛を正確に描いているのである。したがって、全く誤って頼朝の上洛であると記してしまつたのではないことは確かであろう。

江戸幕府將軍家は、その権威の高さから、將軍宣下さえも、上洛することなく、勅使を下向させて済ませていたのである。すなわち、三代將軍家光以後の江戸幕府將軍家は、きわめて高い権威を有していたのである。しかし、一四代將軍家茂の時代に至って、二二九年ぶりに朝廷の命令に従って、上洛せざるを得なかつたのである。すなわち、江戸幕府將軍家の権威は、それほどまでに失墜してしまつたのである。本作品の制作者（版元・浮世絵師）たちは、その失墜した將軍家の権威を揶揄したかったのであろう。

しかし、そのことを直接的に描けば、本作品の絵師や版元は、権威が失墜していたといえども、なお健在な幕府から罰せられることは必定で

あろう。^⑤それゆえ、本作品は江戸幕府とは関係のない、はるか昔の鎌倉幕府初代將軍頼朝の上洛を描いたものであると強弁し、家茂の再上洛を描いたものではないと、あえて主張しなかつたのである。本作品だけでなく、浮世絵には、画題が本紙上に必ずと言ってよいほど明示されていないことを留意する必要があるだろう。^⑥浮世絵を読む楽しさは、明示された画題の裏に、制作者（絵師・版元）が、本当は何を語りたかつたのかを読み取ることであるといえるだろう。

大和絵にしても、文人画にしても、ほとんどの場合が注文による制作である。すなわち、完成後に必ず現金収入が見込まれていたのである。しかし、浮世絵は大和絵や文人画に比して安価ではあるが、不特定多数の庶民の購入によって、初めて現金収入が見込まれるのである。そして、庶民の浮世絵購入を促すためには、現代のマスメディアがそうであるように、庶民が最も喜ぶ強者（幕府）を批判する内容を描く必要があるのである。しかし、言論の自由が声高に叫ばれている現代とは異なり、前近代においては、必ずや幕府批判を行えば、罰則を伴うことが見込まれたのである。そのため、強者批判ではないことを明示するため、過去の出来事になぞらえる必要があつたのである。

本作品の場合、幕府の権威失墜を揶揄することを目的として描きながら、それが頼朝の上洛を描いたものであると、強弁することによって、幕府からの罰則を逃れようとしたものなのである。もちろん、そのような意図があるならば、文久四年の再上洛よりも、文久三年の二二九年ぶりの最初の上洛を描いた方が、より衝撃的ではなかつたかとも思われる。

しかし、船舶での上洛という前代未聞の上洛こそが、庶民の記憶に強く印象付けられていたものと思われる。そして、外輪蒸気船を描けば、画題で頼朝の上洛と明示しながらも、庶民はそれを即座に家茂の再上洛だと納得するだろうと思われるであろう。

おわりに

小稿は、浮世絵「源頼朝公上洛官位之図」について考察を行った。まず最初に、本作品の構図を観察した。次いで、頼朝の上洛に関する事実関係を整理し、頼朝が海路上洛した事実のないことを指摘した。さらに、海路上洛した将軍は、江戸幕府一四代将軍家茂以外に存在しないことを指摘した。

最後に、明らかに家茂の再上洛を描きながらも、頼朝の上洛であると強弁する背景を考えた。家茂の再上洛は幕府の威武が低落したことを如実に示しており、それを揶揄するために本作品は描かれたと思われる。しかし、そのことを直接的に表現すれば、幕府からの叱責を受けることは目に見えていたと思われる。それを回避するために、画題を頼朝の上洛としたものと考察した。

浮世絵は、大和絵や文人画とは異なり、注文制作ではなく、不特定多数の庶民の購買を喚起する必要がある。そのためには、庶民が最も興味を懐く政策批判に注目せざるを得なかった。江戸幕府将軍の權威の失墜を示す家茂の上洛は、庶民を喜ばせる格好の話題であったと思われる。このような意味から、本作品は、浮世絵の基本的な性格を具備した作品

であるといえるであろう。

【注】

- ① 『幕末の紀州藩』（和歌山市立博物館特別展図録、二〇一七）。
- ② 第一四代将軍家茂は、御三家紀州藩の藩主であったが、第一三代将軍家定の急逝によって将軍職を二三歳で襲職した。そのため、出身母体である紀州藩は、将軍家茂の動向に極めて過敏であった。
- ③ 五雲亭貞秀は、浮世絵師歌川貞秀（文化四年〓一八〇七〓明治一二年〓一八七九）である。五雲亭は、彼の初期の雅号。
- ④ 倉本一宏編『古事談』（角川ソフィア文庫、二〇二二）による。
- ⑤ 源頼朝の生涯の概略については、石井進『鎌倉幕府』（中公文庫、日本の歴史七、一九七四）を参照した。
- ⑥ 寛永四年（一六二七）に後水尾天皇が、慣例に従って幕府に無断で妙心寺・大徳寺などの高僧に紫衣の着用を許可したことから、幕府と朝廷の關係は悪化した。そのため、後水尾天皇は幕府の態度に怒って寛永六年に退位した。
- ⑦ 徳川家茂の生涯の概略については、篠田達明『徳川将軍家十五代のカルテ』（新潮新書、二〇〇五）を参照した。
- ⑧ 喜多川歌麿は、文化元年（一八〇四）に豊臣秀吉の醍醐の花見を題材に、浮世絵「太閤五妻洛東遊覧之図」を描いたが、政策担当者を揶揄することに対して、幕府の怒りに触れ、五〇日の手鎖に処せられ、版元も財産の半分を没収されている。
- ⑨ 浮世絵の概略については、藤懸静也『浮世絵』（雄山閣、一九七三）を参照した。

